



British Politics Today

2013年1月1日
第2巻 第1号

著者 菊川智文,

www.Kikugawa.co.uk
tomo@kikugawa.co.uk

この号の内容

- 1 はじめに
- 2 英国の政治システム
- 3 英国の政治システムの運用
- 4 公職の兼任
- 5 国勢調査で見る国際都市ロンドン
- 6 政治の目で見る国勢調査

英国: 議会主権

日本: 国民主権

英国の首相には非常に強い権力を揮える可能性あり

1. はじめに

新年明けましておめでとうございます。

本年がより良き年となりますよう心よりお祈り申し上げます。

日本では、昨年12月の総選挙で政権交代が起きました。英国では、次の総選挙は2015年5月の予定で、まだ2年半近くありますが、各党はその準備に既に動き出しています。今後はそのような話題も取り上げていきたいと思えます。

2. 英国の政治システム

英国も日本も議院内閣制ですが、そのシステムも運用もかなり違います。その幾つかの要点を今回紹介します。

まずは政治のシステムです。その中で最も大切なのは議会主権 (Parliamentary Sovereignty) です。日本は国民主権で、成文憲法を持ち、この憲法に反する法律は違憲となりますが、英国では、議会を構成する、女王と上下両院が国の中心で、慣習法を含む不文憲法であり、制定する法律で基本的にすべてを変えることができます。

もともと英国の権力は、司法、立法、行政の全権を行使する王権から出発しました。そこから長い年月をかけて徐々に様々な権能が別れて行きました。そのため、英国の権力は、お互いの関係にかなりあいまいな要素が残っています。例えば、やっと最近になって三権分立をよりはっきりさせるための手段として最高裁判所が設けられました。それまでは上院の中に最終審の機能がありました。

王権は、英国の日常生活の中で至る所に出てきます。例えば、行政機関には HM (Her Majesty・女王陛下の) という言葉をつけたものが多く、特に刑事裁判では、Regina (女王) という言葉が国の代わりに使われます。また、議会で認められた法律は、女王が裁可するまで正式な法とはなりません。政府の代表者である首相は女王によって任命されます。これらで見ると女王は重要な機能を果たしていますが、女王は、首相のアドバイスを受けて行動し、女王(王)が首相のアドバイスを拒否したことはここ数百年ないことから、首相が極めて重要な存在となります。

首相は、下院で過半数を占める政党の代表者(下院議員である必要がある)、もしくは下院の過半数の支持を得られる下院議員が選ばれます。下院は、選挙で選ばれますが、上院(貴族院)は任命制(一部世襲議員も含む)のため、上院の権限は大きく制限されており、その結果、基本的に「ねじれ現象」は起きないことになっています。なお、8割程度を選挙で選ぶ制度に変えようとする上院改革は失敗しました。その大きな原因は、上院議員の多くが選挙で選ばれるようになると、その正当性が増し、下院の優越を揺るがす可能性があることでした。

首相は、以上のことから下院で支持が得られれば、非常に強い権力を揮うことが可能となります。トニー・ブレア元首相が「大統領的首相」と呼ばれたことがあります。米国大統領には予算決定権がありませんが、英国首相にはそれが事実上あることなどから、英国首相は、米国大統領よりシステム的には強くなる可能性があると言えます。

3. 英国の政治システムの運用

予算



七面鳥の丸焼き

予算は英国の政治システムの運用の中でも特徴があります。予算は、財相と首相が作りますが、その内容は下院議場での財相による発表まで秘密にされます。閣僚にも、予算発表当日の午前の閣議まで内容は知らされません。過去には、閣議で聞いた後、内容の一部を新聞記者に漏らしてしまったために辞職した大臣もいます。ここで、例えば、日本の消費税にあたる付加価値税(VAT)の上げ下げも決定され、発表されます。

アルコールや自動車燃料などでは、例えば、発表当日の午後 6 時から税を上下させることも可能です。仮徴税法、予算決議(Budget Resolution)そして財政法案(Finance Bills)などの過程を経て、それらは順次審議、可決されていきますが、これらを否決することは、内閣不信任と同じであるために、否決されることはありません。なお、これらは上院でも審議されますが、上院には否決する権限はなく、時間も短く制限されています。つまり、少数の人たちが決めた予算がそのまま通る仕組みになっています。ただし、この予算に政権の財政運営能力がはっきりと示されるために各政権とも非常に細かな神経を使います。

政党の規律

英国の政党の理解で重要なのは、総選挙の行われ方です。選挙は小選挙区で行われ、一つの選挙区から最多の得票をした一人が当選します。選挙は通常各選挙区の政党地方支部が行います。つまり、日本でよく見られるように、候補者の後援会が中心になって選挙を行うのではないために、政党をもしかわるようなことがあれば、選挙区を替える必要が出てきます。しかも、選挙費用は、選挙前、選挙中とかなり少額に制限されているために、比較的多くの選挙費用が許されている政党本部が中心となる選挙戦を展開します。

また、政党マニフェストは、それぞれの候補者が討論会などで質問されるためによりよく読んでおくことが多く、マニフェストに書いてあることはそれぞれの候補者が同意しているものと見なされます。つまり、政権に就けば、マニフェストを実施するのは当然と見なされています。

もちろん、政権政党のトップの方針に反対する議員も時に出ますが、その際には、もし政府の職に就いていれば、有給無給にかかわらず、その職を辞する必要があるかもしれません。また、時には政党除名もあり得ます。選挙区で候補者の資格を失えば、次の選挙で当選することは極めて難しいために、下院議員はその行動に慎重になります。

公務員の中立

英国の国家公務員は、政治的に中立でなければならないことになっています。それぞれの省庁を担当する大臣に仕えますが、そのため、例えば、一つの政党下で新設した制度を、他の政党が政権に就いた後、同じ担当者が廃止するということもあり得ます。また、政権政党に所属する議員でも、不明なことや問い合わせがあれば、それぞれの省庁を管轄する大臣に連絡する形となります。

最近、エネルギー・気候変動省の事務次官ポストに関して、国家公務員のトップも同省の大臣も承認した本命の人物がキャメロン首相の反対で次官ポストに就けなかったということが起きましたが、こういうことはそうあるわけではありません。

発表まで秘密の予算

政党の高い規律

公務員の中立

国家公務員が選挙に出馬する際には辞職する必要がある。落選した場合、ある程度以下の職階の人が望めば復帰させなければならない。一定以上の職階の人は、省庁の裁量で、政治的に問題のないポストがあれば復帰させることができることになっている。しかし、国家公務員で総選挙に出る人はあまりいない。

4. 公職の兼任

英国の北アイルランドの政治はかなり複雑です。北アイルランド政府の副首席大臣(権限は首席大臣と同じ)であるシンフェイン党(IRAの政治組織)のマーチン・マクギネスは昨年、南のアイルランド共和国の大統領選に出馬しました。落選しましたが、その際、マクギネスは北アイルランド議会議員、そして議事には出席しませんが英国の下院議員でもありました。そのマクギネスが英国の下院議員の職を辞職しました。英国でよく言われる、ダブル・ジョブリング、つまり、二つ以上の公職を兼任するのは好ましくないという考え方のためです。

北アイルランドには、地方自治体の議員、北アイルランド議会議員、そして下院議員まで兼ねる人が非常に多くいました。中には前首席大臣イアン・ペイスリーのように、その上に欧州議会議員まで務めた人もいました。しかし、この慣行は今や急速に消えつつあります。スコットランドでも当初スコットランド議会議員と下院議員の両方を務める人がかなりいました。

一方、日本の東京都知事にあたるロンドン市長と下院議員を兼ねることは、可能ですが、これは両方の職を同時に務める期間が短い場合を想定しています。ケン・リビングストン前市長は、1年ほど両方を務めました。もちろん給与は両方とも満額ではなく、減額されることになっています。

手作りのクリスマス・プディング



雑記

英国では、12月25日のクリスマスは、国民の休日です。ロンドンでは公共交通機関は航空機とタクシー以外すべてストップし、新聞もありません。イスラム教徒の数も増えていますが、街全体が本当に静かになります。知り合いのイスラム教徒に、クリスマスをどう過ごすかきいてみたことがあります。その人は、子供がクリスマスを楽しみにしているので、クリスマスにはゆっくりと過ごし、友人を訪ねたりすると話していました。子供から親の習慣が変わっていく一つの例かもしれません。

さて、妻と私は、友人の家でのクリスマスパーティに招待されました。子供なしで、大人11人が出席しました。午後1時からスタートし、ドリンク、前菜、メインコース、チーズボード、クリスマス・プディング、クリスマスケーキと進み、途中でクリスマスプレゼントがありました。クリスマスケーキは日本のようなスポンジのケーキではなく、アーモンドなどの入ったドライフルーツケーキです。結局、終わったのは午後10時頃とかなりの長丁場でしたが、クリスマスパーティを満喫しました。この際の七面鳥の丸焼きとクリスマス・プディングの写真は今回掲載しています。

12月26日はボクシングデーで、この日も国民の休日ですが、公共交通機関は再開します。しかし、鉄道は休業、ロンドン地下鉄は組合のストライキであまり動きませんでした。この組合は、ボクシングデーの出勤手当に特別に250ポンド(3万5千円)を出すよう要求したそうです。それは既に契約の中に織り込み済みだからと拒否されるとストの投票を行い、9割の賛成があったそうです。正規の休暇の他に大っぴらに休める日があるのは、その日の日当が無くなっても大きな利点かもしれませんが、一般の利用客にとってはたいへん迷惑です。こういう身勝手な点は、英国の残念な問題だと思います。

5. 国勢調査で見る国際都市ロンドン

ロンドンは、ますます国際都市の名に値する都市となったことがイングランドとウェールズの 2011 年国勢調査でわかりました。昨年ロンドンを訪れた友人が、ロンドンには本当に多くの人種がいるとコメントしましたが、それを裏付けるものです。

ロンドンに住んでいる人の 3 分の 1 以上は海外で生まれた人で、4 分の 1 近い人たちは、英国国民ではありません。そしてロンドンの住人に占める、白人の英国人は半分以下となりました。2001 年には英国人白人と自分で見なす人は 430 万人おり、全体の 58%でしたが、それが 2011 年には 370 万人に減少しました。人口の 45% となりました。

ロンドンで 2 番目に多いのは、インド系の人たちで、150 万人です。3 番目は、黒人の 110 万人。4 番目は、英国人以外の白人で 100 万人と続いています。特に非白人の多い、ロンドン東部のニュー・ハム区には白人の英国人はわずか 17%しかいません。

また、イスラム教徒の多いのは、タワー・ハムレット区の人口 34.5%、そしてニュー・ハム区の 32%です。

宗教的には、イングランドとウェールズで、キリスト教徒が 2001 年には 3730 万人いたのに対し、2011 年には 3320 万人と 410 万人も減りました。一方では、無宗教者が 770 万人から 1410 万人と大きく増え、また、イスラム教徒も 150 万人から 270 万人とかなり増えています。

ロンドンらの国際化が急速に進んでいますが、政府は移民をコントロールしようと躍起です。これは、保守党が移民の数を年に 10 万人以下に制限することを約束したからですが、その目標を達成するのは難しいようです。



クリスマスツリーの販売所

6. 政治の目で見る国勢調査

国勢調査の結果は政治家にとっては、情報の宝庫と言えます。これから学べることがあり、それまでの情報や分析を再確認できるからです。ここでは、イングランドとウェールズの 2011 年の国勢調査に関するタイムズ紙のフィリップ・コリンズの見方に若干のコメントを付け加えて紹介します。なお、コリンズは、ブレア元首相の下でスピーチライターを務めた人で、プロとしてこのような分析をしていました。

①人口の 30%は今や専門的、もしくは技術的な職業についている。今でも多くの人々はブルーカラーとホワイトカラー、そして現場労働者と管理職といったような、かなり一面的な見方をするが、現代では、こういう固定的な見方では当てはまらない人たちが増えている。こういう人たちの支持を得られなければ、選挙で勝てない。かつてブレア元首相は、こういう人たちやいわゆる中流階級を吸収するために、労働党の看板をニュー・レイバーとし、それまでの労働党の路線を修正した。

②人口の 4 分の 1 近い人たちは、健康・医療、ソーシャルワーク、そして教育の分野で働いている。つまり、こういう人たちの支持を受けられるような政策を訴える必要がある。保守党が「思いやりのある保守党」を打ち出しているのはこれに関係がある。

③イングランドとウェールズの人口が 2001 年と比べて 370 万人増え、5610 万人となったが、この増加した人口の半分は、移民によるものである。外国で生まれた人の大多数は労働党へ投票する。

④6 人に 1 人が 65 歳以上となったが、この層は投票率が高い。この人たち向けの政策は重要である。

⑤10 人に 1 人が病気の家族の面倒をみている。英国でもソーシャルケアの危機が叫ばれているが、この分野への政策が重要である。

⑥英国人には家を持つ、という夢がある。家の所有率が 2001 年の 64%から 2011 年の 60%に下がり、そして借家率は、9%から 15%に上がった。国民の夢の回復が重要である。

引用、転載には引用先、著者名を明記して下さい。

コメント・配信お申し込み : tomo@kikugawa.co.uk